

# 「個人主義—集団主義」の概観と日本文化との関係

～日本人は集団主義なのか～

## Overviewing “Individualism-Collectivism” and the Relationship with Japanese Culture

～ Are Japanese People Collectivistic? ~

郭 仁 敬\*

Inkyung KWAK

### 要旨

本稿の目的は、個人主義・集団主義の限界と、日本人は集団主義的だとする通説と日本人のコミュニケーションとの関係を考察し、導き出された問題を解決できる可能性のあるアプローチを提案することである。個人主義・集団主義という文化の指標は、概念的・方法論的課題があることに加え、文化を二項対立的に捉えることによる問題を抱えている。また、「集団主義」概念を基盤とした日本人のコミュニケーションの特徴の説明は、その複雑な背景の一側面しか捉えられていない可能性がある。したがって、人々が言動や状況に抱く「意味の解釈」に注目した質的研究アプローチを採用することで、表面的には集団主義的だと捉えられる言動に関して、既存の枠組みを超えた理解・発見が得られる可能性について議論した。

### 1. 通説について

日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的だという考え方は、コミュニケーション学や心理学、社会学などにあまり接してこなくとも、見聞きしたことがある人が多いだろう。近年はこの主張に反論や疑問を唱える学者も増えてきたが、今もなお「通説」と呼べるほど人々の認識として根強いと考えられ、日本文化と集団主義という物差しを結びつけた文献は数多い。例えば、個人主義・集団主義概念を概説したり (Triandis, 1995)、コンフリクトの対処方法に関して日米比較を行ったり (Ohbuchi & Takahashi, 1994)、日本人労働者の組織内コンフリクトにおける回避 (avoidance) の役割を検証したり (Ohbuchi & Atsumi, 2010)、質的研究 (インタビュー) における沈黙 (silence) の解釈方法を考察したり (Kawabata & Gastaldo, 2015) する上で、「日本は集団主義 (またアメリカは個人主義) 文化」であることを主張の根拠の一つとしている。また Markus and Kitayama (1991) は、自己概念と文化的価値観との関係性に注目し

\* かく いんぎょん 文学研究科英文学専攻博士前期課程  
指導教員：宮原 哲

て文化的自己観という概念を明らかにし、アメリカ人は独立的自己観を、日本人は相互依存的自己観を持つ傾向にあると主張した。これは「個人」レベルの指標だが、「文化」レベルの指標である個人主義・集団主義が理論的基盤となっている。

学術的研究以外でも通説は用いられており、早坂（2020）は、ニュースウィークのコラムで、日本人の民族性の1つとして挙げられる「集団主義」によって、多くの日本人には周囲に目を配り、他者に迷惑をかけないように自分の行動を律する「公共心」があると述べている。そしてコロナ禍では、「自分が感染したくない」と同時に「他者に感染させたくない」という心理からマスクを着けているとしている。一方、個人主義志向の強いアメリカでは「公」よりも「個」を優先するため、マスクの使用を嫌がる傾向が強いと主張する。もちろん、このような考え方も一理あると思うが、「着けないと周りの目が気になるから」という理由を挙げる人もいる。本当に日本人が自身の感染予防と「公共心」のためだけにマスクを着けているのかは疑問が残るところである。

以上のように、通説を土台とした研究は数多く、学問以外でもこの考え方は流布している。通説に合致する言動は日本社会で多く見られるが、その背景はより複雑で、「日本人は集団主義的だから」という説明はその一面しか捉えていない可能性があると考えられる。また、このような一般論の正当性を検証せずに議論を進めてしまうと、本来その研究で導き出せない、根拠に乏しい主張をすることに繋がる危険性がある。さらに、個人主義・集団主義という概念自体にもさまざまな批判や限界がある。例えば、この概念は文化を二項対立的に捉えてしまっており、人々のステレオタイプや価値判断に繋がる可能性を持ち合わせている（Voronov & Singer, 2002）。概念の背景や妥当性を精査することなくそのまま研究に適用してはならない。多くの学術分野で重要視され、影響を与えている概念だからこそ、鵜呑みにするのではなく、批判的に検証する必要があると考えられる。したがって本稿は、個人主義・集団主義という概念や通説に関する文献を参考に、それらの妥当性や限界を考察し、通説では説明できない新しい発見が導き出せる可能性のあるアプローチを提案することを目的とする。

よって、2章では、「個人主義」と「集団主義」という概念そのものを確認し、3章では、概念の持つ問題点について論じる。4章では、日本人は集団主義的だとする「通説」を先行研究や具体例を用いながら再検討し、既存の考え方で説明可能な部分と不可能な部分を確認し、5章でその解決策を提案する。最後に6章で結論を述べる。

## 2. 個人主義と集団主義

オランダの社会心理学者であるヘールト・ホフステード（Geert Hofstede）は、1960年代終わりから1970年代初めにかけて世界中のIBM従業員を対象に調査研究を行い、「権力格差」、「個人主義—集団主義」、「男性らしさ—女性らしさ」、「不確実性の回避」という4つの次元（dimensions）を導き出した（Hofstede, 1980; Hofstede, Hofstede, & Minkov, 2010）。このホフステードの研究は多くの研究を触発し、中でも「個人主義—集団主義」が後の異文化間研究に最も大きな影響を与え、多数の研究を産出した（Brewer & Chen, 2007）。Hofstede et al. (2010, p. 83) では、この次元を以下のように定義づけている（文献内で太字になっている部分はそのまま太字で引用した）。

個人主義（individualism）を特徴とする社会では、個人と個人の結びつきはゆるやかである。人はそれぞれ、自分自身と肉親の面倒をみればよい。集団主義（collectivism）を特徴とする社会では、人は生まれたときから、メンバー同士の結びつきの強い内集団に統合される。内集団に忠誠を誓うかぎり、人はその集団から生涯にわたって保護される。

個人主義・集団主義という指標の特徴の一つとして、多くの要因と結びつけられ、多層的な概念として認識される傾向にある（古家、2018）。Hostede et al. (2010) によると、個人主義文化では「個人」や個人の「独立」を重視し、個人の成果や競争、独自性が評価される。また、明確に言語化されたメッセージから情報を得ようとする低コンテキストコミュニケーション（Hall, 1976）を行う傾向にある。一方、集団主義文化では「集団」の目標やニーズが優先され、自己は他者との関係の中で定義づけられる。常に調和が保たれなければならない、内集団と外集団をはっきりと区別し、内・外集団では価値観の基準が異なるとする。そして、非言語情報を含めた状況から発せられる全ての情報を意味する「コンテキスト」への依存度が高く、言語化されたメッセージへの依存度が低い、高コンテキストコミュニケーションを行う傾向があるとしている。Triandis (1995) もまた、多様な社会的行動が個人主義・集団主義という構成概念から説明できると主張している。例えば、多くの日本人は意見の食い違いや対立を恐れる傾向にあり、人と接する際、率直な意見を述べることよりは空気を読むことが求められると言われる。このような傾向は、和や相手を重視するという「集団主義文化」の特徴から説明されるのである。

しかし、このように広範な定義を適用してしまうと研究上、危険性を伴う（3章参照）。したがって本稿では、大多数の研究で共通する一般的な意味とされる、「個人を集団に従属させるか優先させるか、という対立を基本とする1次元的な概念」（高野・纒坂、1997）として個人主義・集団主義を理解したい。

このように個人主義・集団主義は、個人と集団のどちらを重要視するかということに関わる文化の物差しである。個人主義文化の場合は独立した「個人」を重視し、集団主義文化の場合は他者との関わりの中で個人を定義し、「集団」を重視する。当然、このような文化の枠組みは人々の思考や行動、コミュニケーションと結びついている。一方、一般的にはこれだけ大規模な事柄を説明する指標となるため、個人主義・集団主義には批判や限界もある。そして、その代表は「概念的・方法論的問題」を抱えるということと「二項対立的」だということである。

### 3. 「個人主義・集団主義」概念に対する批判

#### 3.1. 概念的・方法論的問題

個人主義・集団主義は数多くの文化研究に応用されているわけだが、この指標は概念的に2つの問題を抱えている。1つ目は、2章で言及したように、研究者が個人主義・集団主義の構成要素を過度に広範かつ拡散的に定義し、評価する傾向にあるということである（Brewer & Chen, 2007）。Brewer and Chen (2007) が個人主義・集団主義尺度の内容分析を行ったところ、個人主義は「自己表現（self-representation）」と「行為者性に関する信念（agency belief）」として、集団主義は「価値観（value）」として概念化される傾向にあった。つまり、2つは並列する構成概念となっていないのである。また、Oyserman, Coon, and Kimmelmeier (2002) も、現存する個人主義と集団主義の差の大きさに関する尺度を精査したところ、構成概念の定義とスケール内容には大きな不均質性が見られることが分かったとしている。

このような多次元的な構成概念の捉え方は、学問的な分析道具としての有効性を失ったり、文化比較が恣意的なものになったりする危険がある（高野・纒坂、1997）。日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的だという通説が存在するわけだが、個人主義・集団主義が指し示す範囲が広すぎると、どの特徴を基に通説のような主張がなされているのかははっきりしない。人によって思い浮かべる関連性は異なり、研究者によって抽出する部分が違う可能性があるのである。したがって Oyserman et al. (2002) は、個人主義・集団主義の核となる要素（前者は独立と独自性、後者は内集団に対する義務と調和の維持）に焦点を当て、より狭く定義づけるべきだと主張する。

2つ目は、「集団主義」の対象となる内集団が本当の意味での「集団（collectives）」にはほとんど該当しないということである。Brewer and Chen (2007) によると、ここでの「集団」は共通の価値観や規範で

結ばれた個人で構成され、メンバー間の社会的な結びつきに親密な個人的関係は必要ないという。しかし、集団主義研究における「内集団」に関する議論では多くの場合、集団や大きな社会的グループではなく、家族や親友、同僚など、「個人的な愛着の繋がりを持つ特定の間人関係や人脈」(= relational target) が中心となる傾向にあるとしている。この傾向は、Brewer and Chen (2007) が行った個人主義・集団主義尺度の内容分析によって検証された。つまり、「集団主義」概念を用いた異文化研究において主に検証されてきたのは、「集団」志向ではなく、「関係性 (relational)」志向だったのである。Oyserman et al. (2002) もまた、内集団に対する義務と“relationality”は別物として研究されるべきだとしている。

この主張は、浜口 (1992) の提唱する「間人主義」と通じると考えられる。間人主義とは、人間関係の中で初めて自分を意識し、間柄を自己の一部と考えるような「間人 (= 間柄)」を日本社会の分析単位に設定した方が良いとする考え方である。間柄、つまり人間関係を考察の中心に置くところに共通点がある。

筆者は以前、日米韓3ヶ国の大学生のコンフリクト行動を、質問紙調査を用いて研究した (郭、2022)。そして、収集したデータを分析するにあたって、日本人学生は可能な限り公の対立を回避しようとする傾向にあり、相手を思いやったり相手との関係を維持したりするため、そして同時に自分を守るために「相手・相手との人間関係」を意識した行動をすることが分かった。このような結果はまさに、「関係性」志向が表れていると捉えることができる。日本人は集団主義的だという考え方に違和感を持つ研究者がいる理由の一つはここにあるのではないだろうか。

さらに、「個人主義・集団主義」概念を土台とした研究手法の一つには大きな問題がある。その手法は、個人主義・集団主義と行動や個人の特性との関係を、実際に測定することなく、前提として研究を進めてしまうという大きな問題を孕んでいる (Voronov & Singer, 2002)。また、特定の地域や国と個人主義・集団主義との関係を所与のものとする研究も多く、これらの研究は解釈する上で注意を払わなければならない (Oyserman et al., 2002)。例えば、日本は集団主義文化だという考えを前提として、調査で導かれた結果を意味付けしたり考察したりする研究がしばしば見られる。このような手法は、考察の前提の妥当性が確かめられておらず、実際の研究結果から分かる以上の、根拠の薄い主張に繋がる危険性があり、批判も受けやすいのである。

このように、「個人主義・集団主義」は多くの研究で応用されている一方、現状として定義が広範で並列するものとして評価されていない傾向があり、集団主義における「集団」の捉え方にも問題があることに加え、個人主義・集団主義と行動や特性、地域との繋がりを前提とするアプローチは解釈する上で注意を払う必要があり、批判を受けやすいという問題を抱える。さらに、この2つの概念は文化を二項対立的に捉える傾向にあり、そこに文化研究の限界が見られる。

### 3.2. 二項対立的な文化の捉え方

「個人主義・集団主義」という二項対立的な文化の枠組みは、文化を研究する上で類似点や相違点を見つけやすく役立つ部分が多いが、同時に問題も抱えている。高野 (2019) によると、連続量 (高い・低い、良い・悪いなど) を言語でカテゴリー化する場合と同様、文化について語る時は二項対立になりがちだという。そして二項対立では、間が断絶しているため両極端をイメージすることになり、「両極性の錯覚」に繋がると主張する。例えば、一口に「集団主義文化」と言ってもその程度は文化によって様々であり、それぞれの文化は固有の歴史的、社会的背景を持つはずである。しかし、同じラベルを付与されていると、類似した文化的特徴を思い浮かべてしまう人が多く、ラベルごとの相違点にしか目が向けられない傾向があると考えられる。Miyahara, Kim, Shin, and Yoon (1998) は、日本と韓国のコンフリクトにおける違いを研究し、「集団主義文化圏」と一括りにされがちな文化をより詳細に調査することで、見逃されてきた重要な違いやそれぞれの特徴を研究する必要性を論じている。

Voronov and Singer (2002) もまた、文化や社会を二分法で分類することで、その社会特有の微妙な違

いや質的なニュアンスを覆い隠してしまう可能性があるとしている。そして、そのような描写ラベルを用いることで、過度に固定化された、もしくは戯画的なイメージに繋がる可能性や、それぞれの文化の理解を妨げることに加え、善悪の比較に繋がる危険性を示唆する。よく「アメリカ人は個人主義だ」と言われるが、この表現に対して一種のステレオタイプを持つ人は少なくないのではないだろうか。はっきりと自分の意見を言える、揺るがない自分を持っている、と肯定的なイメージを持つ人もいれば、自己中心的だ、周囲に配慮しない、と否定的な捉え方をする人もいると考えられる。しかし、このようなイメージこそ、Voronov and Singer (2002) が述べる文化の二項対立の問題点に該当する。本当にアメリカ人の多くが個人主義的傾向を持つとしても、個人差は必ずあり、行動の背景も文化によって異なるため、文化に対して優劣、善悪という価値判断をすべきでないことを忘れてはならない。

また、平井 (2000) も類似した立場から、「個人主義・集団主義」や Markus and Kitayama (1991) の「独立的自己観・相互依存的自己観」を批判している。人間にとって、「自己の確立」と「他者との関係」の両者は共に重要であるにもかかわらず、上記のような文化二分法理論はこのような事実を軽視していると主張する。近年では必ずしも集団主義と個人主義の両者が両極的に位置づけられるものではないと論じる研究も多いと言うが、人々の認識として、高野 (2019) の言う「両極性の錯覚」に繋がる可能性は否定できない。平井 (2000) は自己と他者の要求が葛藤するジレンマ課題を用いて、人がジレンマを解決するプロセスにおいて、「自己」と「他者」の両方の利益を尊重し、状況に応じた自他の調整を行うことを、実証的研究を用いて明らかにした。そして、平井 (2006) は、この傾向が異なる世代や異なるジェンダーの人々においても共通してみられることを確認した。この結果を踏まえると、人間の言動や思考は二分化された概念で説明できるものではなく、さまざまな葛藤を経てバランスを取っているものだと言える。一方、二項対立的な指標は、自己か他者のどちらかを常に重要視、優先させる文化、もしくは個人を仮定してしまうのである。

このように、二項対立的な文化の捉え方はそれぞれの文化の重要な特性を見逃す危険性を孕んでおり、間違ったステレオタイプに繋がったり、価値判断をもたらしたり、正確にその文化、もしくは人間の特徴を捉えられない可能性がある。それにもかかわらず、「個人主義・集団主義」という概念は数え切れないほど多くの研究の土台としての役割を果たしており、今でも使われ続けている。したがって、「個人主義・集団主義」は有用な点も多い一方で、批判や限界も含むことを念頭に置く必要がある。無批判に受け入れ、今後の研究に踏襲すべきではないのである。

## 4. 日本人は集団主義的なのか

よく日本人は集団主義的だという文言を耳にするが、果たして本当にそうなのだろうか。日本人が集団主義的だという表現は、「出る杭は打たれる」、「和を乱さないようにする」という言葉や、みんなと一緒にあることを重視したり、会議前に根回しをしたりする風潮を例としてよく議論される。実際に、このような考え方や行動は多くの日本人にとって思い当たる節があるものではないかと考えられる。

### 4.1. 通説への反論

高野 (2019) は、「日本人は集団主義的だ」という主張の多くの根拠は上記のことわざやスローガンのような「事例」だと指摘する。そして、事例に頼ることの代表的な問題点は「確証バイアス」に陥る危険性があるということである。確証バイアスとは、何か先入観を持っていると、その先入観に合った事例ばかり目についてしまい、誤った認識に繋がるというものである。例えば、確かに、「出る杭は打たれる」と「個が弱い」という文言は日本人が集団主義的であることを示す例となりうる。一方、「先ずれば人を制す」ということわざもあれば、「個性的だ」と言われる日本人も多く存在する。根拠としての事例には反例

もまた多く見つかるはずであるにもかかわらず、そちらに目を向けなければ、自分の先入観や仮説に合致した事例だけで判断し、正しいと誤解する危険性があるのである。

このような確証バイアスに惑わされないよう、高野（2019）は、文化をきちんと理解し、比較するには、実証的な研究が不可欠だと主張する。そして、高野・櫻坂（1997）は、個人主義と集団主義について統制された条件下で日米比較を行った過去の実証的研究を展望したところ、全体として、日本人の方がアメリカ人よりも集団主義的だとする通説を支持してはいないと結論付けている。妥当性が高いと判断した9件の研究中、通説を支持するものが一つもなかったのである。この結論は、Oyserman et al.（2002）の、メタ分析を行ったところアメリカ人の方が東アジアの人々（特に日本人と韓国人）よりも集団主義的だと証明する実証的根拠はなかったという研究結果と合致する。3章で述べたように概念の定義が広範で曖昧であることがこの結果の一因となっている可能性があると考えられるが、私たちは、実際には正当性が検証されていない主張を通説として受容してきたということになる。

そもそも、「集団主義」は「個人主義」の対立概念として設定されており（浜口、1992）、日本人が集団主義的だと述べる際は、反対にアメリカ人は個人主義的だという説を思い浮かべる人が多い。これについて、高橋（2018）は、個人主義は欧米の文化的特徴であり、特定の文化を他の文化比較の尺度とすることは問題だとし、欧米の個人主義からの視点ではなく、日本文化の中で培われた日本人の特徴をまず理解することが重要だとしている。

このように、高野・櫻坂（1997）や高野（2019）は日本人が集団主義的だという通説に反論を唱えているわけだが、実際に、集団主義的だと言える言動をする日本人が多いのも事実である。また Imada（2012）は、公教育で使用される教科書もまた文化的産物だと捉え、日米の小学校の教科書に出てくる物語の内容分析を行った。その結果、日本で用いられる教科書では順守（conformity）や集団の調和（group harmony）などの集団主義的価値観が物語のテーマとして強調される傾向にあったという。日本において、文化の価値観、理想像としては「集団主義」が少なからず浸透している様子が見て取れる。これは、どう説明できるのだろうか。

#### 4.2. 集団主義的言動をどう説明するか

山岸（2002）は、日米比較実験を根拠として、日本人が集団のために自己利益を犠牲にする行動をとるのは、自分の利益よりも集団の利益を優先するからではなく、集団の利益に反するように行動するのを妨げる「社会のしくみ」、とくに相互監視と相互規制のしくみが存在しているからだとしている。つまり、集団を重視する心の性質を持つ故の行動ではなく、日本社会のしくみや様々なしがらみ、圧力の影響で集団主義的な行動を取っているのだというのである。そして、他人がそのような行動をするのを見ると、帰属の基本的エラーから、日本人皆が集団主義的な心を持つと考えてしまう一方、自分はそのような心は持っていないと考えると主張する。また、山岸（2002）は、日本の集団主義を「『集団への貢献を通しての自己利益の追及だ』としている点」（p. 113）で、「間人主義」を提唱した浜口（1992）と同じ立場を取っている。つまり、集団主義的行動は「個人の利益」を重視した結果だとも主張しているのである。

この考え方を基に日本人のコロナ禍におけるマスク着用を解釈してみたい。2022年11月時点（本稿執筆中）で、厚生労働省は、季節を問わず、屋外でのマスク着用は原則不要（人との距離が保てず、会話をする場合を除く）だとしている。しかし、街を歩くと屋外でもほとんどの人がマスクを付けており、着用していない人の方が珍しい。もちろん、自分や周囲の感染予防のために付けている人も多いだろう。しかし、ひるおび（2022）によると、「『マスクをしないと』周りの目が気になるという声も多く聞かれる現状」があるという。したがって、早坂（2020）の述べる「公共心」だけでは人々の行動を説明できない。後者の人々のマスク着用には、感染対策だけでなく、人から非難の目で見られたり実際に非難を受けたりしたくないという、マスクを付けないことによる「他者から受ける不利益を回避する」心理が見受けられ、社会

からの圧力も背景にあると言える。

山岸 (2002) の学説は、平井 (1999) の、人は「日本人らしさ」のステレオタイプを「一般の日本人」については認めるが、「自分自身」に対しては一般の日本人ほど肯定しないという研究結果にも通じる。そして、「間人主義」を提唱した浜口 (1992) も、いわゆる日本的集団主義は、「個人」の組織への没入や隷属、つまりは「個人主義」の対立概念ではなく、「間人主義」に基づき、個人と集団とが共利共生 (symbiosis) を求める理念を指すものと解すべきだと主張している。

また、日本の集団主義性は日本語の言語学的特徴を根拠として主張されることもある (廣瀬・長谷川、2010)。「人称代名詞の欠如」がその代表で、一般に、日本語には英語の “I” に当たるような人称代名詞が存在せず、状況によって自分の呼び方を使い分けるとされる。例えば、友人や同僚に対しては「わたし」、「俺」、「うち」と言い、先生や上司など目上の人に対しては「わたし」、「わたくし」、「僕」という言葉を使う可能性が高いと考えられる。また、学校の先生であれば生徒に対して自分のことを「先生」、親として子供に接する際は「お母さん／お父さん」もしくは「ママ／パパ」と言うことがある。このような特徴から日本人の自我意識の欠如が見出せると議論されるのである。しかし、廣瀬・長谷川 (2010) は、「自分」という言葉の使い方に注目し、日本語に見られる個としての自己表現には自己志向性の強さが示されているとして、日本人が集団主義的だという主張に対して言語学的に反論している。

さらに、古家 (2010) は、集団主義的に見える日本的コミュニケーション・スタイルを「我利追及」という行動原理に基づく「利己的協調主義」と呼んでいる。「我利追及」は、結果として自分の目標達成 (相手から不利益を与えられないことも含む) に繋がれば、ひとまずは相手を配慮したり、妥協したり、自分の要求や意見を廃棄したりするという判断も含む。そして、この行動基盤はどの文化の人も共有するものであり、その土台を基に、どのような行為決定をするかは文化差が影響するとしている。つまり、日本人は表面的に集団主義的行動をしているが、それは、自分の損得が前提となった上で、日本文化の価値観の影響を受けた「利己的協調主義」的なものだと主張する。この考え方は、日本的な集団主義を「内集団ひいきの相補均衡」で、「自己利益の追求」だとした山岸 (2002) の学説にも通じる。したがって古家 (2010) は、日本人は「個我が確立していない」との議論を批判し、個の存在が前提になっていることを強調する。

以上、取り上げた研究は、内容の違いはあれども、日本人は集団主義的で個人よりも集団を重視する利他的な価値観を持つという通説を全般的、もしくは部分的に批判しており、「個人主義・集団主義」という物差しの限界も示唆している。それでは、実際に「日本人は集団主義的だ」と言われる場面には具体的文脈としてどのようなものがあるだろうか。

#### 4.3. ビネット (Vignette)

集団主義の限界点も踏まえて仮の状況 (Vignette) を作成してみたい。筆者が創り出した話に過ぎないが、具体例を考察することで、改めて概念や通説の問題点を明らかにできると考える。

花と陽菜、葵の3人は同じ大学の3年生で、入学当初に出会った友人である。大学内ではその3人で講義を受けたりご飯を食べたりすることが多く、放課後や週末もよく共に出掛ける。中でも花と陽菜は家が近いため、2人で遊びや食事に出掛けることもある。そして、3人は前期の期末試験を控えており、現在は試験の1週間前である。

その日、花は陽菜に「試験勉強ばかりすると疲れるし、来週のどこかで息抜きしにドライブ行かない？」と提案する。以前の陽菜であれば誘いに乗っていただろうが、3年生になったことで専門科目が増えたため、試験勉強に不安を感じており、気楽に遊びに行けそうにはない。また、陽菜は試験以外にも提出すべきレポートを抱えており、試験期間が終わるまで遊びに出掛ける余裕は全くないと感じている。そこで、陽菜は花に申し訳ないと思いつつ、仕方なく「息抜きはすごくしたいけど、私、試験勉強が全く進んでいないし、レポートも書かないといけないから行けなさそう。ごめん、全部終わってから行こう」と断る。

すると、花は、「そうなんだね。確かに勉強が優先だし、ドライブは試験が終わってから行こう。だったら、夜飲みに行くのはどう？」と陽菜の意見を汲みつつ、代案を出す。花は、いくら試験勉強や課題があったとしても、飲みに出掛けるくらいは適度な息抜きで、負担にはならないだろうと考えたのである。一方、陽菜は、晩御飯ただだとしても数時間外出することになるため、やるべき勉強や課題の量を考えると負担に感じる。しかし、実は、陽菜は数日後の学校帰りに葵とランチの約束をしている。花は用事がありランチには来ないが、この約束のことを花も知っている。よって陽菜は、一度花の提案を断っていることに加え、葵とはご飯の約束をしている手前、再度断ると花を傷つけてしまうのではないかと心配になる。そして、花とはこれからも仲の良い友人関係を維持していきたいと考えているため、花との約束だけ2度も断ると嫌われるのではないか、もう誘ってくれなくなるのではないか、という不安も感じている。さらに、もし断ったことで花の機嫌を損ね、2人の関係性が変化してしまった場合、3人グループで会ったときには葵にもその変化を気づかれる可能性が高く、気まずくなるかもしれないという懸念点もある。

したがって、悩んだ結果、陽菜は飲みの誘いを受けることにする。ドライブやご飯に誘ってもらえたことは嬉しい一方で、試験や課題に関する不安や自分の予定していたスケジュールが変更されたことに対する不満も抱えることになったのである。

#### 4.4. ビネットの考察

上記の仮の状況は、陽菜が結局は自分の本音を言わずに花の誘いを受けたことから、いわゆる通説の事例となりうるものだと考えられる。相手を傷つけず、友人関係を維持させるために自分の言いたいことを我慢することは、既存の集団主義的価値観と合致する言動である。しかし陽菜は、花を傷つけない、関係を悪化させたくないという思いだけでなく、彼女に嫌われたくないという自己保身的な思いも抱えている。これらの感情は、表面的には「本音を言わず相手の誘いに乗る」という同じ行為として現れているが、前者は「相手」、後者は「自分」を重視していると言える。

もちろん、両者をきっぱりと区別できるわけではなく、相手を傷つけることで自分が嫌われたくない、嫌われて関係を壊したくない、という形で影響し合っていると考えられる。平井（2000）が主張するように、私たちは「自己」もしくは「他者」のどちらかだけを常に優先しているとは言えないのである。このような思考は、郭（2022）において、可能な限りコンフリクトを避けたり円滑に解決しようと考えたりする日本人学生の中に、そのように行動する理由として「悪印象を持たれたくない」、「悪口を言われたくない」、「面倒」といった旨の回答をした人がいたことと相通じるものがある。

また、花と陽菜という1対1の関係だけでなく、葵を含めた3人の関係も意識しているという部分にも注目したい。関係や和の維持を重要視するという点では集団主義的だと言えるだろう。しかし、その思考の背景として、葵に気づかれたくない、気まずくなりたくないという思いがあると解釈できる。相手だけでなく自分の不利益も回避しようという考えが窺え、ここもまた、「集団を個人より優先させる」という意味での集団主義志向だけでは説明できない部分である。

このように、ビネットの例は、表面的には集団主義的だと言えるかもしれない。しかし、「個人を集団に従属させるか優先させるか、という対立を基本とする1次元的な概念」として個人主義・集団主義を捉えた時、「個人を集団に従属させた」結果だと言えるだろうか。他者や集団を意識した結果には違いないが、個人、つまり、自分自身の立場や利益を考えた結果とも言えるのである。したがって、「日本人は集団主義的」だという通説は社会の一側面しか捉えておらず、その背後に人々が持つ意味や理解までは考察されていないと考える。ビネットの内容は筆者の想像に過ぎないが、表面的には集団主義的だと捉えられる言動も、その背景を詳細に研究すると「集団主義」という学説だけでは説明できないさまざまな心の葛藤が見出せる可能性があることは示せたのではないかと考える。それでは、実際にそのような知見を得るにはどのような研究の方向性が考えられるだろうか。



## 5. 問題点の解決策の展望

日本人のコミュニケーションの特徴は「集団主義」という概念を用いて説明されることがあるが、その説明には限界がある。確かに、人間関係の維持や調和を大切にするという「他者」や「集団」を意識する面では従来の集団主義概念と結びつけられた価値観を用いて説明できる。しかし、その言動を行う人の背景はもっと複雑で、通説はその表層しか捉えられていない可能性がある。また3章で見たように、「集団主義」という指標そのものが正確に文化の様相を表せない可能性もある。では、既存の物差しでは表面化されていない部分を明らかにするにはどうしたら良いのだろうか。

高野（2019）は、文化理解や比較のためには実証的な研究が不可欠だと主張しており、筆者自身、実証的研究の利点が多いことは理解している。しかし、実証的研究、中でも量的研究を通して複雑な人間の文化やコミュニケーションをどれだけ正確に捉えられるのかは、筆者としては疑問に思っており、そこにも限界や批判があると考える。好井（2006）は、「対象者の人生をめぐる感じ方や価値、生活実感、情緒などを1から7までの尺度にむりやり落とし込もうとする力がもつ問題性」（p. 33）を指摘している。このような価値判断は簡単に数値化できるものではなく、限界があるのである。

一方、研究対象とする価値観や言動に対して、数値を通して特定の概念に適用させるのではなく、人々が持つ「意味」に着目し、既存の枠組みを超えた理解が可能となる場所に質的研究の魅力があると考えられる。コミュニケーション学において解釈的アプローチを取る研究者は、人間にパターン性は見られるが、そのパターンは人々が相互作用を通して学ぶ、進化し続ける意味体系や規範、慣例の産物だと捉えている（Croucher & Cronn-Mills, 2019）。「意味の解釈」を重視する質的研究を通して、日本においていわゆる集団主義的だと言われる言動が人々にとってどのような意味を持ち、どのような相互作用から産出・維持されているのかを調べることで、「個人主義・集団主義」という枠組みにとどまらない、新たな発見が見出せる可能性がある。

具体的な研究方法例として、人々のコンフリクト行動に関して、半構造化インタビューを用いて彼らの実体験を基盤とした語りを導き出すことが挙げられる。コンフリクトに注目するのは、人と意見や価値観が異なり、その状況を解決しなければならない時こそ、自分と他者両方の立場を認識し、検討、熟考した上で特定の行動を選択しなければならない代表的な場面だと考えられるからである。コンフリクトが起きた際に自己主張をしない・できない人々は通説の例としてよく持ち出される。しかし、インタビュー調査を通して、人々が自分のコンフリクト行動や状況そのものをどう捉え、どのような意味を付与しているのか、どのような内的葛藤を経て特定の選択を行ったのかなどを研究することで、言動の背景を既存の枠組みにとらわれず、より深く理解できる可能性がある。インタビューの中でも「半構造型インタビュー」を取り上げたのは、研究者の研究目的に合わせて大枠の質問項目は設けられつつも、語り手のペースに合わせて比較的自由に、リラックスした形で語りを引き出すことができる（猿橋、2011）からである。個人的な価値観や経験を問う必要があるため、適切だと考えた。

また、エティック（etic）とは文化に普遍的なものさしで比較研究することを指し、イーミック（emic）とは文化固有の事象を文化固有の枠組みで分析、研究することを指す（末田、2014）が、外から見た集団主義的な言動を深く理解するためには、イーミック的視点が不可欠だと考えられる。表面的には類似した言動でも、文化によってその意味や理由、背景は異なるはずで、文化共通の指標では重要な文化独自の観点が見逃される可能性があるからである。上記の研究方法を用いることで、人々の意味付けの仕方と日本の歴史的、社会的背景との結びつきを探ることも可能となるだろう。以上のような質的研究を採用することで、「個人主義・集団主義」という既存の知見に頼らず、「日本人のコミュニケーション」に関して新たな、より深い発見が得られると考える。

## 6. 結論

本稿では、個人主義・集団主義という概念とその批判、中でも個人主義・集団主義の概念的、方法論的問題や文化を二項対立的に捉えることの問題点を考察し、日本人が集団主義的だとする通説について先行研究や仮の具体的状況を用いて議論した。具体的に、個人主義・集団主義は、概念として包含する構成要素が広範で並列するものとして評価されておらず、集団主義概念における「集団」の意味に問題があることに加え、個人主義・集団主義と特定の行動・特性や地域との関係を前提とした研究は方法論的に危険である。また、本概念は二項対立的に文化を捉えており、そのような認識は、それぞれの文化特有の違いを覆い隠してしまったり、特定のイメージを抱いたり、善悪や優劣のような価値判断をしてしまったりすることに繋がる可能性がある。さらに、従来、日本人のコミュニケーションの特徴は（他文化と比較される際には特に）「集団主義」という概念から説明されることが多かったが、この解釈は、その背景の一側面しか捉えられていないと考える。本概念が後の研究にもたらした影響は多大だが、その学説には限界や批判点があるのである。

したがって、そのような問題点を解決できる可能性のある、人々が言動や状況に抱く「意味」に焦点を当てた質的研究アプローチを提案した。このアプローチを採用することで、既存の「個人主義・集団主義」という知見を超えた理解と、日本文化固有の枠組みを考慮した研究が可能になると考える。もちろん日本の中でも個人差はあるだろうが、今一度、現代の日本人のコミュニケーションを日本文化が長年培ってきた伝統や社会システム、価値観や信念などに着目して分析・研究することは、日本のコミュニケーション研究において意義のあるものだと考える。

## 参考文献

- Brewer, M. B. & Chen, Y.-R. (2007). Where (who) are collectives in collectivism? Toward conceptual clarification of individualism and collectivism. *Psychological Review*, 114(1), 133-151.
- Croucher, S. M. & Cronn-Mills, D. (2019). *Understanding communication research methods: A theoretical and practical approach*. New York: Routledge.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Garden City, NY: Anchor Press.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's consequences: International differences in work-related values*. Beverly Hills, CA: Sage.  
(ホフステード G. 萬成博・安藤文四郎 (訳) (1984). 『経営文化の国際比較』. 産業能率大学出版部).
- Hostede, G., Hofstede, G. J. & Minkov, M. (2010). *Cultures and organizations: Software of the mind*. McGraw-Hill Professional.  
(ホフステード G., ホフステード G.J., ミンコフ M. 岩井八郎, 岩井紀子 (訳) (2013). 『多文化世界 違いを学び未来への道を探る』. 有斐閣).
- Imada, T. (2012). Cultural narratives of individualism and collectivism: A content analysis of textbook stories in the United States and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43(4), 576-591.
- Kawabata, M. & Gastaldo, D. (2015). The less said, the better: Interpreting silence in qualitative research. *International Journal of Qualitative Methods*, 14(4), 1-9.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98(2), 224-253.
- Miyahara, A., Kim, M.-S., Shin, H.-C., & Yoon, K. (1998). Conflict resolution styles among "collectivist" cultures: A comparison between Japanese and Koreans. *International Journal of Intercultural Relations*, 22(4), 505-525.
- Ohbuchi, K.-I. & Atsumi, E. (2010). Avoidance brings Japanese employees what they care about in conflict management: Its functionality and "good member" image. *Negotiation and Conflict Management Research*, 3(2), 117-129.
- Ohbuchi, K.-I. & Takahashi, Y. (1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. *Journal of Applied Social Psychology*, 24(15), 1345-1366.
- Oyserman, D., Coon, H. M. & Kimmelmeier, M. (2002). Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 128(1), 3-72.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Westview Press.

- (トリアンディス H.C. 神山貴弥, 藤原武弘編 (訳) (2002). 『個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化—』. 北大路書房).
- Voronov, M. & Singer, J. A. (2002). The myth of individualism-collectivism: A critical review. *The Journal of Social Psychology*, 142(4), 461-480.
- 郭仁敬. (2022). 「Conflict における日米韓の違いとその文化的要因」. 西南学院大学卒業論文.
- 猿橋順子. (2011). 「インタビュー法」. 末田清子, 抱井尚子, 田崎勝也, 猿橋順子編, 『コミュニケーション研究法』 (p. 142-155). ナカニシヤ出版.
- 末田清子. (2014). 「多面的アイデンティティの調整とフェイス (面子): 立教大学卒業後の足跡」. 『異文化コミュニケーション論集』, 12, 19-40.
- 高野陽太郎. (2019). 『日本人論の危険なあやまち—文化ステレオタイプの誘惑と罠—』. ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 高野陽太郎, 櫻坂英子. (1997). 「“日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”—通説の再検討—」. 『心理学研究』, 68 (4), 312-327.
- 高橋正. (2018). 「日米文化比較: 日本人は集団主義か個人主義か」. 『英語英文学研究』, 43 (1), 51-76.
- 浜口恵俊. (1992). 『間人主義の社会—日本』. 東洋経済新報社.
- 早坂隆. (2020). 「日本人の「集団主義」「同調圧力」には良い面も悪い面もある」. Newsweek. <https://www.newsweekjapan.jp/hayasaka/2020/08/post-7.php#ulCommentWidget> (2022年11月23日閲覧).
- 平井美佳. (1999). 「「日本人らしさ」についてのステレオタイプ—「一般の日本人」と「自分自身」との差異—」. 『実験社会心理学研究』, 39 (2), 103-113.
- 平井美佳. (2000). 「問題解決場面における自己と他者の調整」. 『教育心理学研究』, 48, 462-472.
- 平井美佳. (2006). 『自己—他者間の葛藤における調整』. 風間書房.
- ひるおび. (2022). 「“周りの目が気になってマスクを外せない” 新たなマスク着用ルールを検討へ【ひるおび】」. TBS NEWS DIG Powered by JNN. <https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/176779> (2022年11月23日閲覧).
- 廣瀬幸生, 長谷川葉子. (2010). 『日本語から見た日本人—主体性の言語学』. 開拓社.
- 古家聡. (2010). 「日本的コミュニケーション・スタイルのマクロ的再解釈—日本人集団主義説をもとに—」. 『日本コミュニケーション学会』, 38, 173-192.
- 古家聡. (2018). 「日本人集団主義説の再解釈: 「利己的協調主義」をもとに」. 『Global Studies』, 2, 27-36.
- 山岸俊男. (2002). 『心でっかちな日本人—集団主義文化という幻想—』. 日本経済新聞社.
- 好井裕明. (2006). 『「あたりまえ」を疑う社会学—質的調査のセンス』. 光文社新書.